

碧巖録

寒山寺摂心会

古くから宗門第一の書とされている

☆雪竇重顕（せっちようじゅうけん） （宋代九八〇〜一〇五三）

古徳（唐代の禪者の伝記）からの公案百則

本則 公案

頌 詩の形の一つ

☆圜悟克勤（えんごくごくごん）（一〇六三〜一一三五）

垂示 圜悟より要領よく簡潔に舒せられたイントロダクション

評唱 圜悟が思う存分に古を評し今を論じ、与奪自在、時に厳し

く時に緩に、本則や頌に対する注釈や解説的な事柄を述

べたもの

著語（じゃくご） 下語（あぎよ）

本則と頌のほとんど一文毎にコメントを付けたもの

臨済宗の専門道場においては、修行者が自分の悟境を深めるための公案集として用いられている。寒山寺摂心会では、妙心僧堂師家島田大拙老師による提唱が開講されています。

『碧巖錄』は古から宗門第一の書と呼ばれてきたものであります。これは宋代の雪竇重頤（九八〇—一〇五二）が、古徳の公案百則を撰んで頌した、いわゆる『雪竇頌古百則』というものがあつて、後世、圓悟克勤（一一〇六—一一三五）がこれを評唱して『碧巖錄』としたものです。なお碧巖録と名づけましたのは、圓悟がこの評唱を完了した夾山靈泉院（湖南省）の方丈の扁額に、『碧巖』の二字があつたので、それを取つたのです。その碧巖の由来は、夾山善会（八〇五—八八一）に、或る僧が「いかなるか是れ夾山の境」と問うと、善会が「猿、児を抱いて青嶂の後に帰り、鳥、花を啣んで碧巖の前に落つ」と答えたところから來たのです。

『雪竇頌古百則』の内容は、雪竇が一百則の公案を選び、それを拈弄したり、著語を加えたりし、更に一則一則に頌を賦したものであります。拈弄とは、自分の實力を以つて、その公案を別の取扱ひをして見せ、あるいは古人の到らないところを指摘したりすることを言います。頌は普通は頌（しょう）と呼び、詩の形の一つで、君主の徳などをたたえる詩をいいますが、それを禪者が用い、宗旨の徳をたたえる詩としました。その意味で禪家では、宗旨の眼を具えていない詩は、いかに風雅な作であっても、頌（じゆ）とは言いません。雪竇は、言句の妙密をもつて特徴とする雲門宗の宗旨を極めた人であり、後世、「十翰林の才あり」との評を受けたほど、先天的に詩才の豊かな人でしたから、その頌は実に立派であつて、私どものようなものが見ても、一千年の永い中国

禪界を通じての第一人者だと思ひます。

『碧巖錄』の内容は、垂示・本則・評唱・頌・評唱という五段から成り、そのうち本則と頌が雪竇、垂示と二つの評唱が圓悟で、また本則と頌には、ほとんど一句ごとに圓悟が著語を下しております。こんなふうに、雪竇の拈弄し著語した本則と頌を骨格とし、圓悟が垂示という頭をつけ、著語や評唱という肉や皮や、尾や鱗をつけて、一尾の完全な魚としたのが『碧巖錄』であります。

垂示は、圓悟が本則の公案の内容を睨んで、宗要を学徒に示されたもので、その無礙自在な大機辯をもつて、宗旨に深あり浅あり、向上あり向下あり、把住あり放行ある仔細を、要領よく簡潔に舒せられたもの。その文章の整った点から見て、垂示だけはその草稿を圓悟みずから書かれたものではあるまいかと思われまふ。

本則や頌に下した著語は、短い語句、それも、嚴格高尚な古句もあれば、平明な日常の語句もあり、当時行われた俗語や俚諺などを、自由に駆使して、普通の言葉では説明もつかず、表現もできない宗旨の要所を、ある気合をもつて突き、寸鉄人を刺すの鋭さで、禪機を感得させています。なお、この著語を見るに注意を要しますのは、一句しかないところもありますが、二句も三句も重なっているところがあり、しかもそれらの句の意味が、全く相反していることもあることです。これは圓悟が評唱を三回行つていて、その時その時、角度をかえて批評したものを、弟子たちがそのまま忠実に記録したからであると思ひます。

評唱は、本則の後と頌の後とに、圓悟が提唱した言葉で、これは垂示のように簡潔にまとまってもいず、また著語とも違い、散文の形であります。その代り圓悟が思う存分に、古を評し今を論じ、与奪自在、時に嚴に、

時に緩に、その憂宗の熱情を傾けて、切々として訴え、諄々として諭し、門下の学徒の道情を激発せしめようとしたものであります。

また『碧巖録』には、全部にある筈の垂示が欠けた則もあり、評唱や著語の中にも、とんでもないと思える文章の一節が、どうみても有るべからざるところに入っていたりします。これを古から「火後の入組み」といっております。それは圓悟の提唱によって完成し出版された、この『碧巖録』が世に出るや、当時の雲水たちが、それを読んで、その語句を暗記し、悟りもしないのに悟ったふうをしたりしたので、圓悟の高弟、大慧宗杲が、雲水の教育上よろしくない、好ましからざる教科書の役割をするとして、これを一挙に焚いてしまいました。後にこれを復刻したが、その際、内容の乱雑を来たしたというのであります。

これらと内容とする『碧巖録』は、十則を一巻として、全十巻を数える大部なもので、明治以後も、その提唱や講義は世間に多く出ておりますが、今では専門道場で提唱する時以外は、著語や評唱までを含めた全篇を、本格的に講ずることは稀になっております。講本としての『碧巖録』があまり大部にすぎるから、これもやむを得ぬことであります。

★寒山子撰心金は全篇の本格的講義です。

私のこの提唱も、垂示と本則と頌について講じ、折にふれ評唱の内容も、皆さんに話していくように努めております。

昔から私の宗門、臨済宗では、經典や祖録を講じますのに、提唱と講義とに分け、提唱は、単にその書籍を講義するのでなく、それを通じて自己の宗旨を提唱するもので、宗門の大事を明らかにした師家分上の人でなくてはし

★寒山子撰心金は提唱です

ないものとされ、講義はその人の学問の力次第、誰でもやってよいとされていきます。ですから、たとえどれだけ佛教教学に精通した人でも、禅の修行のできていない人は、祖録の提唱は遠慮したものです。大ざっぱに考えれば提唱も講義も違いはないようではありますが、禅の語録が提唱でなくてはならず、講義ではないけない理由は確かにあると思います。第一に宗旨のわからない者が、宗旨を含む言句や、たらしきを、ああこういうことそれ自体が無理です。もう一つ重要なことは、禅の提唱はそれによって学徒を提撕し、誘引啓発するにあります。殊に語録を媒介として行われる提唱には、厳密に或る一線を画して、説くべき境界と、説くべからざる境界とを、自己の見識と為人の親切とをもって、維持しなければならぬのです。すなわち、言つてよいところ、言つてわるいところを、はっきりさせてかかる用意がいります。実際に禅の修行をしている者の指導に当って、この用意を欠きましたならば、着実に修行を積み、すこやかに生長して大成すべき人材を、あたら廢物にする恐れがあります。禅ではこれを人を教壞するといひます。それで禅者は、ある一点に至ると、師家としては「点滴も施さず」という厳格さを持ち、学者も「また他の一滴を受けず」という、頑固なほどの自主的潔癖さを要求するのであります。

こういふと、それでは禅者は提唱においては、なるべく宗旨を知らしめないようにするのかと疑うかも知れませんが、そうではない、わかるだけはわからして、実参に俟たなくてはならないところを実参さすのであります。この提唱は、なにぶんにも在家の皆さんを対象として講じたものですから、少しでも多くわかつてもらい、少しでも多く親しみを感ずってもらいたいと思つて、できるかぎり平易に噛みくだいて講じておりますが、何ぶんにも

祖録の提唱ですから、時には皆さんを突き放したような場合もあるかと思えます。だがしかし、単なる祖録の言句の講義にとどまることなく、一貫して私のいう「佛心」の信心を骨格として、提唱し来たつたと言つてよろしい。たとえ、すべての人が禅を究極のところまでやって悟らないまでも、私のいう「佛心」の信心を決定^{けつじやう}してもらえば、立派に安心立命^{あんじんりやうみちやう}を得ることが出来るのであります。読んでくれる人も、どうか言句の理解にとどまらず、安心を決定するよすがとしてもらえれば、私の『碧巖録』提唱の本懐は達せられるわけです。またこんなものが縁となって、禅に実参しようとする方が出たりするならば、こんなうれしいことはありません。

碧巖録提唱へ朝比奈宗海著

山喜房より 五

後押